



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	The Thought of Kingo Miyabe, Kanzo Uchimura, and Inazo Nitobe : Independence, Tolerance, Nature, Health, and Views of Women in Japanese Christianity [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	Komasin, Stephanie Midori
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15660号
Issue Date	2023-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/90766
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Stephanie_Komasin_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： コマシン ステファニー ミドリ

学位論文題名

The Thought of Kingo Miyabe, Kanzo Uchimura, and Inazo Nitobe: Independence, Tolerance, Nature, Health, and Views of Women in Japanese Christianity

（宮部金吾、内村鑑三、新渡戸稲造の思想：

日本のキリスト教における独立、寛容、自然、健康、女性観）

・本論文の観点と方法

本論文は、「イエスを信ずる者の契約」に署名した札幌農学校1期生2期生を中心とするキリスト教徒集団、いわゆる「札幌バンド」、その中でも宮部金吾、内村鑑三、新渡戸稲造の宗教思想がどのようなものであったかを探究したものである。

その研究方法としては、これまで見出されていなかった一次資料を発掘、調査し、紹介するとともに、それらを二次資料と合わせて分析することによって、「札幌バンド」、特に上記3人の宗教思想を日本のみならず欧米の宗教思想研究を視野に入れながら論じ、さらに彼らの宗教思想の特質と今日的意義を見出そうと試みている。

・本論文の内容

本論文では、「札幌バンド」が、日本の文化的・宗教的環境の中にありながらも、イギリスの「非国教徒の遺産」(Dissenter heritage)、すなわち非国教徒の信仰に基づく思想や生き方を受けつぐ者たちであることを論証している。本論文は八つの章からなり、第1章から第4章においては、「札幌バンド」の宗教思想を理解するために、札幌農学校の教授たちから彼らが受けた影響の特質を詳細に提示している。後半の第5章から第7章においては、宮部、内村、新渡戸がどのように、またどのような「非国教徒の遺産」を受け継いでいるかを論述し、最後の第8章では結論と今後の研究の見通しを記している。

第1章は、土着的なキリスト教運動として「札幌バンド」を紹介しつつ、W. S. Clark を「ピューリタン」とするような従来のステレオタイプな理解を退け、彼が「札幌バンド」のメンバーに与えたキリスト教的影響は、日本各地で宣教師たちが与えた影響とはおおいに異なっていると主張している。とりわけ、従来の研究においてあまり関心が寄せられてこなかった Clark の “Dissenter” としてのキリスト教思想や行動の特質を再評価している。

第2章は、第1章の否定的な議論に続き、Clark の信仰や思想をより詳細に検討し、とりわけ、「歴史」、「清潔」、「野心 (ambition)」、「禁酒・禁煙」、「健康」、「道德教育」などに関する彼の考え、あるいは神道との関わりなどを論じ、彼が「ピューリタン」という定義に一致しないことを論証している。

第3章では、「ラディカル・リフォーメーション」の担い手たる（レヴェラーズ、クェーカーなどの）「非国教徒」やその系統に連なる教派の “Protestant Dissenting traditions” の継承者として「札幌バンド」を捉え、そのようにして、彼らは日本における「日本的独立キリスト教」を形成したと論じている。その際、（「会衆派」、「ユニテリアン」などの）教派それ自体ではなく、上述のような影響を受け継いだ日本独自の反教派主義的で独立した「札幌バンド」の特質を表わすために、「非国教徒の遺産」という用語・概念を提唱している。クラークが保守的会衆派教会の仲間のみならず、C. R. Darwin の進化論支持者などとも交流し、札幌農学校のユニテリアン教授たちとすら協働することができたのも、「非国教徒」的な宗教的寛容の現われであるとしている。

第4章では、従来あまり重視されてこなかった Clark と彼が卒業しその教育と運営に携わった神学校との関わり、慈善・伝道活動と彼の親族の関係、ドイツ留学中に彼が通った教会のあり方など

を検証し、そのような Clark の伝記的要因のみならず、D. P. Penhallow、W. Wheeler、W. P. Brooks らの信仰や道徳観もまた、「札幌バンド」の非教派的な思想や教会観に影響を与えたことを、宮部の回想などを手がかりに分析している。

第5章では、内村の歴史観を、特に、アマースト大学留学中に影響を受けた歴史学者 A. D. Morse との関連で検討し、Morse の政党政治中心の歴史観だけではない内村独自の歴史観、あるいは（聖書と天然と）歴史の「三者」という彼の「信仰の基礎」を示すとともに、内村がそのような考えに至るには、農学校以来の T. Carlyle の影響、クェーカーやユニテリアンなどとの交流があったことを指摘している。

「札幌バンド」の諸特徴（孤立した環境での自給自足、学生寮の質素さ、平信徒牧師によるスピリチュアル・ケア、民主的な教会運営など）や、それらをきっかけにして、また教派主義や有給の聖職者との苦い体験から生まれた、独立した信仰へのこだわり、異なる信仰に対する寛容さなどは、内村に見られる「非国教徒の遺産」の一つであるとされる。さらに、教派への経済的な依存は自由な信仰のあり方を妨げるので、経済的独立を維持する必要があると主張した点も、内村に見られる同様の遺産であるとされる。

第6章では、人間の本質と結びつけた新渡戸による「宗教」の定義や彼自身の神秘主義的経験について検討している。また、今まで不明であった札幌遠友夜学校の設立に提供された資金の提供者を特定するなど、クェーカーと新渡戸とのいっそう深い繋がりを指摘している。新渡戸の女性観に関しては、ジェンダー本質論であるとしながらも、性役割の二元性に固執しているわけではなく、“feminism” や “feminist” といった言葉を用いたことで、『青鞥』などよりも日本人女性に大きな影響を与えたとされる。さらに、新渡戸による女性の理想的美徳や欠点の指摘、宗教の力で見識と道徳的美徳を完成させるという「新しき女」といった彼の「新婦人観」を、森有礼など同時代人の「良妻賢母」論と比較して、新渡戸は単に母性を称賛するだけなのではないと指摘している。

第7章では、宮部の宗教思想や生き方を分析している。宮部の科学者としての働きは、「札幌バンド」全員のために必要な天職であると内村などは見做していたが、キリスト教の天地創造や進化論をも取り込んだ宮部の自然神学は、人間という動物が自然の秩序に従うべきであるという警告だったのだと解釈される。宮部は、仕事と私生活の調和と心身の健康を保ちつつ、有用 (“useful”) 性（神や他人の役に立つ存在であること）や長寿を損なわないようにと説いているが、宮部の健康観には、Clark が通った神学校の軍事教練などの影響もあるのではないかと指摘している。宮部は、女性の大学入学や正規学生としての受け入れのために貢献したが、宮部にとって理想的な夫婦関係は、職場で配偶者とともに学問的な研究を行なうことであったという。さらに、宮部は、北海道においてキリスト教徒が先導した学校などで慈善活動を行なっているが、彼が優生学的考えを持っていた可能性を否定できないことも指摘されている。

第8章の結論では、「札幌バンド」のキリスト教には、非国教徒の「宗教的寛容」、「良心」、「会衆制」、札幌農学校教授らの「科学研究と宗教的实践」、「健康」、「慈善」をめぐる考え、北海道の学生寮と自然で育まれた「信仰」、「経済的独立」、「簡素」など、さまざまな要素が含まれていることをまとめとして列挙したうえで、それらの多くはまた、「非国教徒の遺産」という概念で括ることができるだろうと結論づけている。最後に、この「非国教徒の遺産」という考えは、日本のキリスト教のみならず、他のキリスト教社会に関しても分析枠組みとして用いることができるのではないかと提案している。